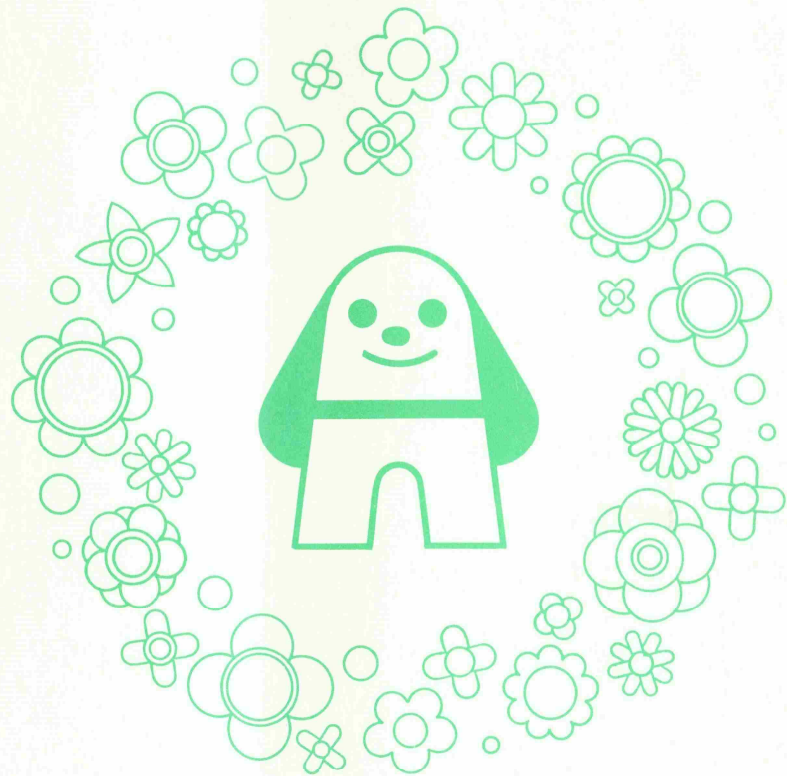


創作童話集



熊谷市中央公民館

熊谷市立図書館	
NO 71181	
昭和 55.7.30	
LA913	郷
K	

婦人を中心としたボランティアの輪が広がっています。
 婦人のかくれた能力を社会に活かし、積極的に社会参加
 することを目的として中央公民館では昭和五十三年度婦人
 ボランティア講座を開きました。その中の創作童話の部門
 で五名の方が熱心に学びました。どれも立派な作品です。
 ここにその成果発表の創作童話集が完成いたしました。
 どうぞご覧いただきたいと思えます。

熊谷市中央公民館

目次

ロンパリ けんちゃん	……	小林明子	3
ゆすらごの みるころ	……	小林明子	10
とけいの 3じくん	……	細田浪江	15
つれてくればよかったなア	……	針谷照波	23
まこちゃんと へび	……	福田まさ	31
ごお、よん、さん、にい、いち	……	小島朝子	35

あとがき

小林明子	……	42
細田浪江	……	43
針谷照波	……	43
福田まさ	……	44
小島朝子	……	44

ロン パリ けんちゃん

小林 明子

「ただいま」
けんちゃんが 学校から、
かえってきました。

けんちゃんは、小学校三年生で
体いくと きゆうしよくの、
大すきな、男の子です。

だから、ながい夏やすみや、冬やすみはもちろんのこと、みじかい 春やすみだつて おわりのころになると、学校へ いきたくて、いきたくて、たまらなくなりま
す。

でもね、ほんというど、もっと 大すきなものがあるんです。



それはね、テ、レ、ビ。
そう、みんなも大すきな あのだい テレビジョンなの。
さんすうの九九は なかなか、おぼえられなかったけれど、テレビのばんぐみは、
すぐ おぼえてしまって 何よう日に「キャプテンフューチャー」があつて、何じ
に「やまと」があつて、「水戸黄門」のさいほうそうはいつあるか——。



けんちゃんの あたまの中は
テレビばんぐみで いっぱいです。
だから きょうも かばんを、
しよったまま、もう テレビの
チャンネルを まわしています。
「おかあさん おやつ なあに」
と、いいながら まだ テレビの
まえに かばんをしょつて、立っ
ています。
「だめね はやく かばんをお

ろして、手をあらって、うがいをしなさいよ」

「はあい」

けんちゃんは、大きなこえで、へんじは しましたが、テレビのまえから うごこうとしません。

「それに テレビの 見すぎは 目に どくなのよ」

おかあさんは すこし ちからをいれて いいましたが けんちゃんの耳には おかあさんのこえが、きこえていないようです。しらんかおをしています。

おかあさんは おこったかおで パチンと テレビをけしました。

しかたなく けんちゃんは 「はあい」と、また、へんじをして かばんをおろし、手や口をあらいに せんめん所^{じこ}へいききました。

それから いく日かすぎました。

けんちゃんは 学校から 一まいのかみを、もらってきました。それは このあいだ 学校でやった眼^めのけんきの けっか「ちりようを ひつようとします」というお知らせでした。

「あんなに いったのに いうことをきかないからよ」

おかあさんは こまったかおです。

「うん」

けんちゃんは じぶんも そうおもう というように、「こくん」どうなづきました。そういえば、よく見ると、けんちゃんの目は、このごろ、ロン・パリになっているみたいです。ロン・パリってしていますか。ロンドンとパリーののように、くろ目が あっち、こっちを、みていることを いうのだそうです。テレビを、見すぎて けんちゃんは こんな目になってしまいました。

おかあさんは しんぱいして すぐ 眼^めい者^めさんへ けんちゃんをつれていきました。

「ふふん これは テレビのみすぎだね」

「それに、しせいがあるい。ねてみたね」

やぎのような 白いひげの せんせいは、やさしく いいました。

「はい」

けんちゃんは、とても はずかしそうです。それに、先生が とてもよくじぶんの



ことを しているので おどろきました。

「眼めい者せんさんて、千里眼せんりがんなのかな」

「ぼく もう テレビ 見ないよ」

「ほんと？」

「おやくそくよ」

けんちゃんは ほんとに そのときは けっしんしたのです。

でも つぎの日は もう、やくそくを やぶってしまいました。

「すこしならいいや。わからないもの」

けんちゃんは ぎぶどんの上に ごろんと、よこになって、テレビマンガを 見はじめました。お日さまが ぼかぼか いいきもちです。けんちゃんは ねむくなりました。

ふと きがつくと けんちゃんのかおの上で ひだりの目とみぎの目が、けんかをしています。

「ぼくは、ロンドンだ」

「わたしは パリーよ」

どこか出かける はなしのようです。「ロンドンだ」、「パリーだ」といいあって いるうちに、二つの目は「ぶん」とせをむけて、べつべつの方こうに、あるき出しました。

けんちゃんは、あわてました。

「ねえ ちょっと まってよ、はなしあえば、わか

るんじゃない」

このあいだの 学級会がっきゅうかいのときをおもいだして、いっしょうけんめい とめました。

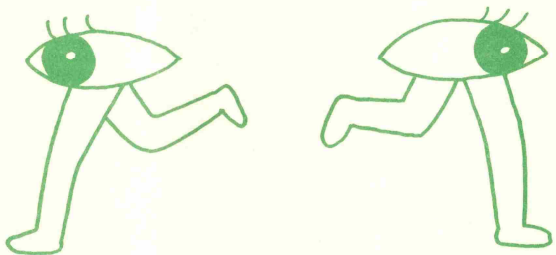
でも、二つの目は しらんかおです。

「わあい、たすけて」

目は どんどん けんちゃんから はなれていきます。

「いたいよ、おかあさん、たすけて」

あんまり、大ごえを だしたので、けんちゃんは、じぶんでおどろいて 目をさましました。そして いそいで 目を手で さわってみました。目は、ちゃんと け



んちゃんの おおにありました。

「ああ ゆめで、よかったな」

けんちゃんほ ほっと しました。そして こんどこそ テレビは 見すぎないよ
うにしようど けっ心をしました。

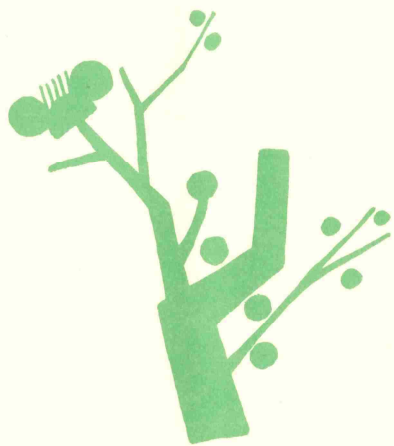
ほんとうに 目が ロンドンとパリへ 行ってしまったら、こまりますものね。

おわり



ゆすらごのみのるころ

小林 明子



今年も、ゆすらごの実が、ルビー色に、じゅくす、
季節になりました。

あき子ちゃんたちの、たった一人の男きょうだい、

のぶ男にいさんが死んだのは、あきちゃんが、小学校四年生のときでした。

日本が、アメリカと戦争せんそうをして、敗まけて、食べるものも 着るものも、ないころ
でした。

おとなたちは、毎日、食べるものを、みつけてあるきました。高いねだんでこ
っそり、ヤミ米を買かったり、お金をだしても売うってくれないときは、大切な着物と
たべ物を交換こうかんしてもらったり。その日、その日を生きるために、みんな、いっしょ
うけんめいでした。

ながい戦争で、みんな、つかれきっていました。だれもが、がんばりました。ほんとに、小さかった。あきちゃんたち、五人の女のきょうだいたちでさえ、わがま、を、いいません。

だから、学生だった、あきちゃんのおにいさんも、体がわるいことをわすれて、がんばりました。むりして、軍事教練に出ました。炎天下を何時間も、重い銃やにもつをせおってあるきました。むりして、勤労働員で農家や工場で、なれない仕事もやりました。

あきちゃんのおにいさんは、あまり、むりをしたので、ついに、リューマチ熱から、心臓弁膜症になって、倒れてしまいました。

それは、戦争に敗けた年の、寒い冬の日でした。あきちゃんたち五人のいもうとに、おにいさんは、

「よくなって、かえってくるから、心配しないで、まっておいで。」

と、小さなふろしきづつみをもって、おとうさんに、つきそわれて、国立病院に、入院しました。

あのころ、医学も、げんざいほど、すぐれていませんでした。お父さんは、あち

ら、こちらに、たのんで、ペニシリンをやっと、手にいれ、お医者さんに、六じ間おきに、注しやしてもらいました。おにいさんは、とても元気になり

「戦争の爆撃にあっても死ななかつたんだから、今死んだら、死んでも死にきれないよ」

と、じょうだんをいうほどになりました。

病人のためといっても、今みたいに、バナナも、ケーキもありません。おすしも、おせんべいも、手に入りません。お母さんは庭の赤く色づいた、ゆすらごの実やいちぢくを、せっせと、病院に、はこびました。

「おいしいね。ほんのり甘味が、つたわってくる。」
ルビー色に、じゅくした、ゆすらごの実をほおばりながら、おにいさんは、家の庭を、思いうかべていたのでしょうか。

じょうぶになって、たい院する日を、楽しみにしてまっていたのでしょうか……。

よくなったと思ったおにいさんは、よ病をへいはつしました。病室には「面会謝絶」の紙がはられました。

そして、おにいさんの死が、つゆ空のくらい朝、あきちゃんたちに、知らされま
した。

あきちゃんは、知らせをきいて、かけて、かけて、町のはずれの病院へ、いそぎ
ました。ひくく、たれさがった空からは、雨が、ぽつ、ぽつ、ふってきました。あ
きちゃんは、なみだと雨で、ぐちゃぐちゃになって、病院につきました。

もう、そのときは、おにいさんは、つめたい^{れいあんしつ}霊安室にいました。

“ 夕日はかくれて、道なお遠し^{わす}

行末いかにと 思いぞ煩ろう

わが主よ今宵も^{こよい} 側方にまして^{かたえ}

淋しきこの身を はぐくみ給え。



教会の方がたが、おにいさんの大好きな、さんび歌を、歌いながら、白百合の花
で、棺^{ひつね}をかざりました。

お父さんも、お母さんも あきちゃんも、四人の小さいもうとたちも、泣きま

した。子どものあきちゃんは、はじめて、「死」がこんなに
悲しく、むごいものかを知りました。

——もし、戦争がなかったら——

——もし、おにいさんが、戦争中に 無理しなかったら、死
なずにすんだのに——

あれから、三十年いじょうもたちました。あきちゃんも、
四人のいもうとも、みんな、おかあさんになりました。子ど
もを失^{うしな}った、親の悲しみが、すこしづつ、わかる年ごろにな

りました。

お父さんは七十九才、お母さんは、七十六才。いまでも元気です。

ゆすらごは、今年も、赤い実を、いっぱい

つけて、風にゆれています。



とけいの 3じくん

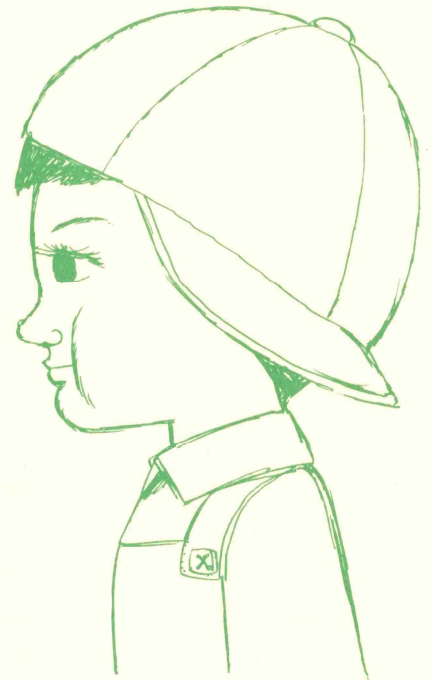
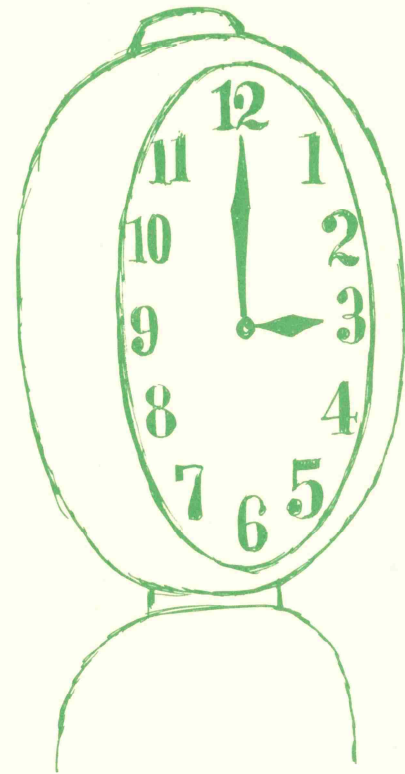
細田 浪江

リンリンリン、リンリンリン、……………。
ぼく、とけいの 3じくんです。
なかよしの ともだちはね、としくんでしょ
いぬのチビと、ねこのコロと、ヒヨコのピヨちゃん。
みんな 3じくんが だいすきだよ。
だってね、3じくんが
「リンリンリン、リンリンリン」って、
なるとね おやつのはじかんだもん。



3じくんが としくんに いいました。
「あれっ きみには めがあつて くちがついているぞ。
おもしろいな、へんだなあ」。
としくんは びっくりして いいました。
「へんじゃないよ。
ぼくと ならめっこしようよ。
あっぷっぷ」
3じくんは
「ぼくのかおには なにがあるかな。
あっぷっぷ」





あかい はりを 3に セットして
みじかい はりが 3に きてね。

くろの ながいはりが、12のところへ とどここ かけて くと、

リンリンリン リンリンリン。

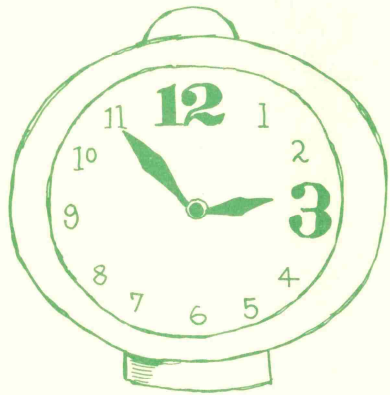
ベルがなって 3じですよ。

にらめっこを していたら もう 3じです。

「リンリンリン、リンリンリン。」

3じだよ、おやつのはかんだよ」

3じくんが おおきな おとで しらせました。



としくんが

「ぼく いちばん」

いぬのチビが しっぽを ふりふり、かけ
て、きます。

ねこのコロは くちのまわりを なめなめ

「おやつは なあに」

のっそり よって きました。

ひよこのピヨちゃん

「ピヨピヨ おなかすいた」

としくんは ミルクパン

いぬのチビは ビスケット

ねこのコロは おさかな

ひよこのピヨちゃんは むぎごはん



ところが あるひ 3じくんがなりません。ながいはりがー、みじかいはりが2
のところととまって、うごきません。
としくんも チビも コロも ピヨちゃんも みんな おなかすいて ペコペコ
です。

「3じくん どうしたんだらう。」

テレビは 3じのニュースがはじまったのに」と いいながら としくんは そつ
と、3じくんを なげました。

「はやくリンリンならしてよ ワンワン」

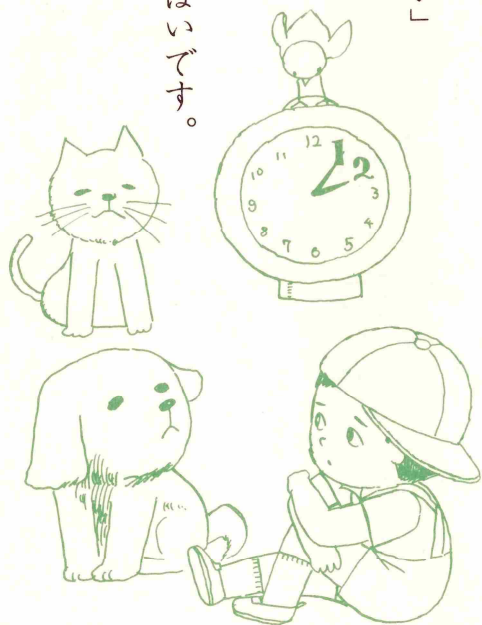
「ニャンだか おかしい。」

3じくん とまっているよ」

「おなかの いたい 3じくん」

みんな 3じくんの ようすが しんぱいす。

どうしたのかなあ——。



「あっ そうだ。」

3じくんにも おやつを あげなかったよ。
ぼく でんち もってくるよ」

とけいに でんちをいれて はりをあわせたら、リンリンリン、リンリンリン……。
と 3じくんは あわてて ならしました。
さあ いつものおやつですよ。



「ああ おいしかった ワンワンワン」

「ごちそうさま ニャンニャンニャン ペロペロ」

「おなか いっぱいふくらんだ ピヨピヨ」

3じくんも でんちをいれたら げんきです。

としくんやちびとコロとピヨちゃんも

「3じくん ありがとう。」

おやつのはかかん また おしえてね」

といって

おにわにかけて いきました。

おわり



つれてくれればよかったなア

針谷 照波

六年生の なつ休み、アキ子は

大学生の 一郎にいさんに、山に

つれていってもらいました。

そのかえりみちのことです。

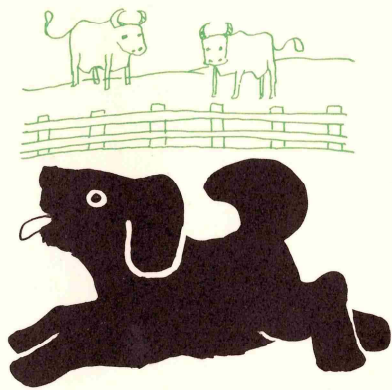
「おい 早くこーい、牧場だぞーッ」

一郎にいさんの声が 山道のさきのほうから きこえてきます。

「ホーイ」

山に咲く きれいな花をつんだりしていたアキ子は、大急ぎで かけだしました。

一郎にいさんのところに きてみると、そこは ガケの上でした。下に ひろびろと ならかな みどりの丘が ひろがっています。牛はみえませんでした。みどりの丘には遊びにきた人びとが たのしそうに、丸くすわって、おべんどうを



ひろげたり、草地の上を お父さんと こどもと おにごっこしたりしています。

明るい色のかべ、青いやね まどには ピンクの日よけ 白いレースのカーテンが いかにも気もちよい きれいな たてものも たっています。

「わあ！ にいさん こんな山の中なのに、ずいぶん しゃれた 牧場ねえ、」

「そうき、ここはまだ できたばかりだからね。その青いやねは レストランかな？」

「わあ、うれしい、ぢゃ そこでなにか 食べられるね。アキ子 おいしいものを たくさん 食べてやるぞ」

「ハハハハ それでは デザートには コツテリした アイスクリームを おごろうか」

「わア サンキュー！ にいさん」

アキ子は ピヨコン ピヨコン はねながら、

「ぢゃ早く いこ いこ」

と、いって もういっぺん 牧場を みわたしました。

すると いつ どこから きたのか、大きな黒い犬が 牧場を かけていました。

その犬は とても大きく、牧場を 西から東へ、北から南へ、気もちよきそうに かけまわっているのです。

一郎と アキ子は 牧場へ入っていききました。そして、きつき 上からみおろした きれいな レストランに 入りました。

「さあ のどが かわいた、牧場ぢやあ、まず 牛乳だね、しぼりたての こい 牛乳を二本づつ たのもうネ」

「ウン、それから 食べるもの なんにしよう、アキ子、ハンバーグがいいわ」

「そうかい おれは……カツライスと…… それから 新せんなサラダも いいぞ！」
「ぢやあ あたしも サラダ」

ホールの中は、家ぞくづれや 山あるきスタイルのわかもので にぎわっていました。

まっ白い帽子に まっ白い服の ボーイさんが いそがしそうに 注文の料理を

はこんで います。

一郎とアキ子も 席について 料理を まちながら 牛乳をのんでいます。すると きつきの犬が入ってきました。

「にいさん!!にいさん、きつき牧場の方にいた 黒い犬が、ホラ 入ってきた」

「ウン 大きな犬だナー」

犬は だれかをさがすように みんなの間を ウロウロしてから、アキ子のところへ くと 足もとにねそべりました。

「おまたせしました。ハンバーグに、カツライスに サラダ 二人前ですね」

「ハイ、あ、それから すこしたったら アイスクリームを 二人前おねがいします」

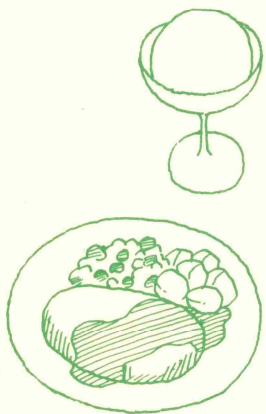
「承知しました」

「ウフフ アキ子 うまそうだゾー」

「いただきまます」

「いただきまます」

「クロ、クロ、おまえは黒いから クロだヨ ホラクロ! あげるヨ」



アキ子は ハンバーグのはしを すこし 足もとにいるクロに やってみましたが 知らん顔で、ただ前足なんかペロペロ なめているだけ……。

一郎とアキ子はおいしい食事をすませて ホールを ぐだました。すると クロも のっそり 立ちあがって ついてきます。

「あれ、クロちゃんついてきたヨ」

「オイ、クロ、おまえ 牧場の犬だろ」

「おいでよ、一諸に どこまでもおいで」

クロは そのとおり どこまでも いっしょに ついてきます。

道は 松林の中へ 入りました。

松林の中から 散歩の牛が 七、八頭 かたまつて こちらへ やってきます。

その うしろから カウボーイも馬にのってあらわれました。

ツバの広い帽子に いきな ネットカチーフ、手には皮のムチ、ゆうゆうと 馬に またがってくる姿は 本場の西部劇をみているようです。

牛たちも、のんびり、ゆったり 歩いています。ステキな しゃれた牧場だなア、と、アキ子は思いました。

そのうちに、先頭の牛が クロを みました。すると 急に 牛は早足になりました。みるみる 近づいて 大きな目をギロリと 白く 光らせました。

「こわーい、にいきん！ 牛が……」

牛は クロの方に 向っていきます。

クロは たすけをもとめるように、一郎のそばにかけよって 一郎にぴったりくっついて歩きます。

「オイ、クロ！ にげろッ」

もし牛が おそいかかってきたら どんなことにも なるでしょう。アキ子は一郎にいきんが やられそうだと 心配でたまりません。みると 先頭の牛だけでなく ほかの牛たちも みんな こちらにきます。

もう、牛の荒い鼻息も フツフツプルンときこえてきます。そして、先頭の牛が、頭を グツと下げて 角をかまえ とびかかってきそうなのです。

「あっ！」

にいきんが 突かれる……。

目の前が まっくらに なるような おそろしい いっしゅんでした。

「ピシッ」っと

するどくムチが 鳴り

「アイヤー・ットウー」

カウボーイが 高い はげしい声で 牛を叱りました。すると 角で突こうとしていた牛は 急に頭をあげて 方向をかえて はなれていきました。

ああ たすかったー。

ホッと むねをなでおろして、アキ子と一郎は、顔をみあいました。

「クロ!! お前のおかげで ひどい目に あうところだったんだゾー」

「ホントよ、クロ、クロおまえは いつも牛に いぢめられているの? かわいそうに」

「ハハハハ 牛にやられそうになったときは、クロも ちいさくっていたよ」

こんな大きな体を しているのに、おとなしいクロ、

一本松の停留所からバスがでます。そこまで三十分、クロは どうとう そこまで 一諸にきて しまいました。二人がバスを まつ間も クロはどこへも いきません、おとなしく、ねそべっています。

バスがきて、どうとう おわかれです。

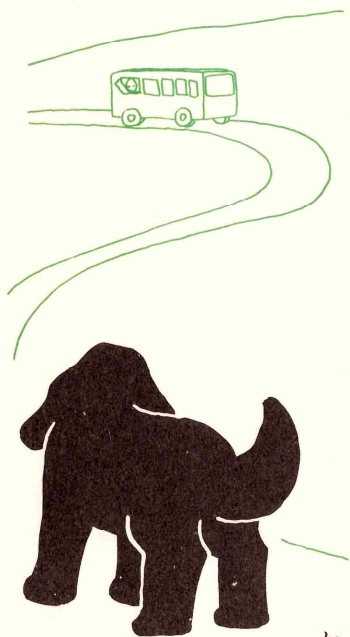
クロは 立ちあがってバスをみおくりました。

あれから どうなったでしょう?

あのクロは? いつまでも思いだします。

アキ子は クロを 自分のうちまで つれてこられなかったのが ぎんねんです。また あの牧場へいったら あえるかしら、アキ子は ときどき かんがえるのです。

クロは アキ子が背中のにれるほど 大きかったのです。



おわり

まこちゃんどへび

福田まさ

雨が、きーっと降ってきました。

まこちゃんは、おじいちゃんと 自転車ののって帰ってきました。

「ママ、ほら、ほうら」

「あっ、へび！ おじいちゃんに せがんで どうとう

買ってもらったのね」

ママは、気味わるそうな顔で笑いました。

おもちゃのへびは、五十センチぐらい。青ぐろい背なかで、黄色い腹をして、しゅうしゅう音をたてて、赤い舌を、ちよろっちよろっちと出します。

「こんな、おもちゃを買ってどうするの」

おばあちゃんが言いました。

「おばあちゃん、へび年なのにどうして、へびがきらいなの。僕の友達は、みんな持っているんだよ。大きいのを持ってる子が、一番つよいんだから」

みんなが、こわがる、おもちゃを持って、お友達を、びっくりさせる子供が一番強いなんて、おばあちゃんは考えこんでしまいました。

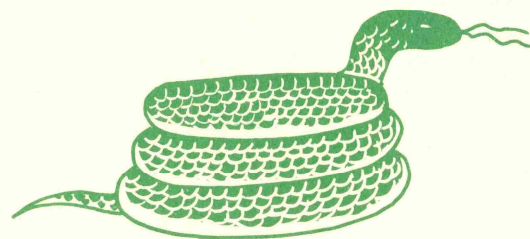
パパと、ママと、弟の卓ちゃんは、お家へ帰ってゆきました。

まこちゃんは、おばあちゃんの、お家に、とまってゆくことになりました。

「おばあちゃん、へびって、こわくないんだよ、ほーら、ほらね、何にも悪いことなんか、しないんだから」

手の中で、まるめたり、畳のうえを、はわせてみたり、「おばあちゃん、こわいの、ぢゃあ、僕、箱の中へしまっして寝るね」

まこちゃんは、どんな、夢を見ているのだからか、もう、すやくくと、寝入ってしまいました。



今日は、まこちゃんど、吉見の百穴へ、ゆくことにしました。

「おばあちゃん、これ、持ってっていい」

「どうして」

へびを、伸ばしてみたり、まるめてみたりしている、まこちゃんを、見て、「いいよ」と、承知しました。

バスに乗ると、まこちゃんは、おもちゃの、へびを、ちよつどのぞかせました。

おばあちゃんは、「まこちゃん、ポケットから出してはだめよ、女のひとと年よりは、みんな、へびはきらいなのだからね」そつと言いました。

街へゆく、バスの中で、まこちゃんは、おばあちゃんの耳に口を寄せ「おばあちゃん、女のひとと、年よりは、へびはきらいなんだよねっ」と、ささやいて、座席にもどり、安心したように、ポケットに手をつこんで、笑っていました。

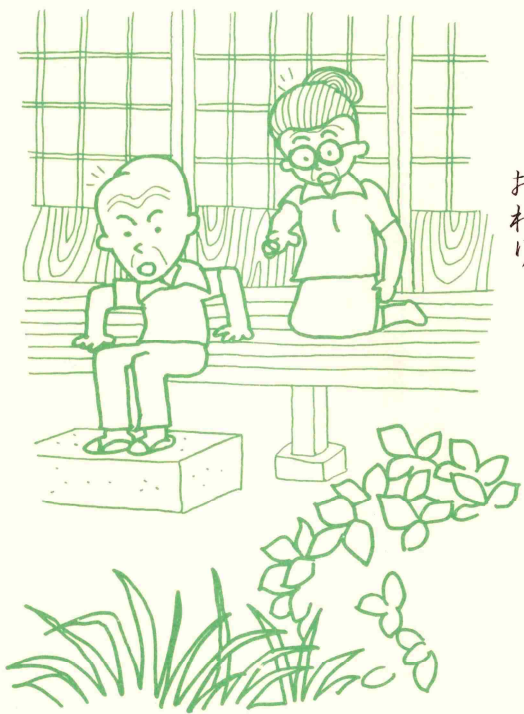
二日ばかりして、まこちゃんは、迎えにきたパパの車に、のって帰ってゆきました。

つまらない、おもちゃばかり、ほしがらないで、ご本でも読む子に、なってくれたらと、おばあちゃんは、思っておりました。

ある朝「おじいちゃん、ご飯ですよ」と、えんがわまで、ゆくと、庭先を、よろくと、はってゆく、本物の、へびを見ました。

なんだか不思議と、へびが、あわれに思われ、まこちゃんのことを、おじいちゃんと、話しながら、へびが、かくれていた草むらを、いつまでも、いつまでもながめていました。

おわり



ごお、よん、さん、にい、いち

小島朝子

かずくんは、小学二年生。

げんきで、やさしい おとこの子。

学校が 大すき、学校で、ともだちと

あそぶのが、とっても 大すき。

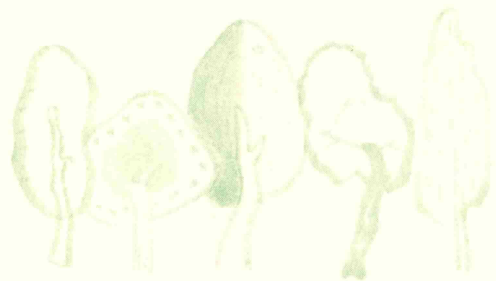
でも かずくん、べんきょうは、あまり

いっしょうけんめいしません。うちでも、

すこしやると あくびがでて、ねむくなってしまいます。

もうすぐ、一学きも おしまいの ある日のことです。かずくんは、おかあさんにいいます。

「ねー。こんど ぼくのつうちひょう、5がつくと思う?。」



おかあさんは、にこにこ わらいながら、

「そうね。かずくんは あまり べんきょうしないから、5ちゃんは そういう子は いやだっていって、もつともつと、いっぱい がんばっている おともだちのところへ、いってしまいかもね」

「じゃあ、4は いくつ つくかなあ」

「4ちゃんも、だれのところが いいかなあって、まよっているんじゃない。かずくんも、先生のおはなしを よくきいたり、しゆくだいま ちゃんとすれば、4ちゃん『かずくん、大すき』って、きてくれるわよ」

かずくんは、おもしろくなって、ききます。

「3は つくね、きつと」

「3ちゃんは、おともだちが たくさんほしいって、みんなのところへ あそびにくるわよ。かずくんも あそびが大すきだから、なかよくしてねって、たくさんくるわ」

「2は?。」

かずくんは、もつと ききます。



「2ちゃんは、あひるさんに のって、ゆっくり ゆっくり、ともだち さがして いるわよ。かずくんは、かけあし おそいから、2ちゃんや あひるさんと、のんびり あそんだら」

「1は、どうかなあ」

「1ちゃんは、やさしい やさしい子なのよ。びょうきで たいそうの できないおともだちのところへ行って、こん にちわっていかもよ」

「じゃあ、ぼく びょうきばかりして、学校へいかなかつたら、1がつくんだね」

「そうよ」

おかあさんは、かずくんのせなかを ぽんとたたくと、

「ゆうごはんのしたくをしますからね。かずくん、しゅくだい しっかりやってよ」といって、だいどころへ 行ってしまいました。

かずくんは、しゅくだいの かん字かきどりを はじめました。

はじめたと おもったら、まぶたが、すぐおもくなり、どうどう ねむってしま

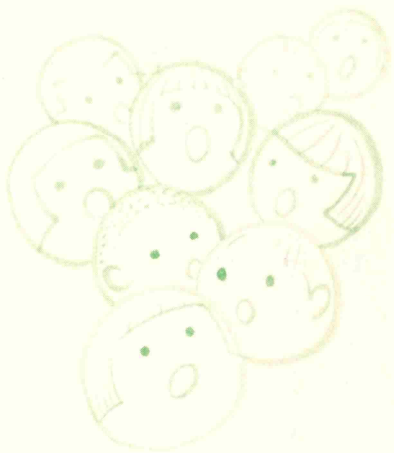
いました。

かずくんは、あたりいちめん みどりのじゅうたんを しきつめたような、のはらに たっていました。

のはらには、大きな木が 5本ありました。

一ばん大きな 木は、 いきいきとして 大空に えだやはを、いっばい ひろげています。

その木には3がたくさん なっています。木の下では、ともだちが 大きなこえで、うたを うたったり、ゲームを したり、のびのび あそんでいます。かずくんは、すぐ、なかまに入っ て、あそびました。みんな、なかよしの ともだちです。



すぐそばに、5のなっている木も ありました。その下では、すこし、白いかおをした石川くんや、大山くんたちが、つくえを だして、べんきょう しています。

かずくんは、そばへ行って、こえを かけました。

「ねえ。いっしょに あそぼうよ」

「ぼく、べんきょうが おわったら、じゆくへ いくから だめなんだ」

石川くんが、いいました。大山くんも、だめだめって、てを ふって ことわり
ます。

かずくんは、

「じゃあ、またあとでね」

といって、そのまた となりの、4のなっている木の下で、あそんでいる とも
だちのところへ いきました。

えを いっしょうけんめい かいている 大のくん。かずくんも 大のくんのそ
ばで、おはなしを つくり、えを かいて、小さな本を つくりました。

やきゆうが 大すきな 田口くんは、バットを もって、
大きな かけこえをかけています。かずくんも、まぜても
らいました。でも、ざんねんながら、三しん。



そのうしろに、2のなった木が ありました。

こかげで、なわとびのれんしゆうを していた あお木くんが、よんでいます。
かずくんも いっしょに、いち・にい・さんと、まえとびの れんしゆうを しま
した。あせを、いっばい かきました。しんぞうが、どきどき、おとを たてまし
た。でも、まえとびが、なかなか うまくできません。

となりの 1のなっている木の下で、ハンモックにゆられながら、あこちゃんが
ねていました。かずくんは、そつと そばを とおりました。あこちゃんは、ねつ
があるみたいです。かずくんは、

「かわいそうに—— と、おもいました。」

「ぼく、のどがかわいちゃった——」

水のみばで、水を いっばい のんだ かずくんは、こんどは、おしっこが
したくなりました。

「どこかに、するところは ないかなあ——と、さがしていると おかあさんの
「かずのしん かかたろう。ごはんだよー」
と、ふぎけて よぶこえが、きこえてきました。」

「はい」

と、いきおいよく へんじをした かずくんは、そのひょうしに、目が さめま
した。

ちやのまで、おかあさんが わらって、たっていました。

もうすこし ねていたら、おねしよを するところでした。かずくんは、いそい
で べんじよに いったくと、

「わあー、ぼくのすきな ハンバーグだ！」

「かずのしん かかたろう、手を あらったの」

かずくん、へんじも しないで

パクついています。

かずくんの かん字^じかきとり

は、きょうも すすんでいませ
ん。

おわり



あとがき

小林明子

私たち 五人の仲間が 「創作童話をひろめるボランティア」として、学習始めたのは
昨年の八月でした。人は誰れでも、自分の、人生や夢を、絵や文に表現したいと、思うも
のですが、それは、決して容易なことでは、ありません。早船ちよ先生、早船ぐみお先生
中野みち子先生の「童話は誰れでも書けます」という、暖かい指導により、おそろくやっ
と書きました「ゆすらごのみのるころ」。「童話」というより「綴方」といった感じになっ
て、しまいました。が、童話は、子どもの愛読書として、作者の日常生活態度というか、姿
勢というか、ゆとりある心、優しき 暖かき、清らかき、童心等欠くことの出来ないもの
であることを、毎日、毎日、忙しさに追いまくられて、子どもを 見つめること、対話す
ることを忘れてしまった私にとって、如何に大切かを知りました。

「自分で作った童話や詩を、地域社会にひろめ、子どもたちとのふれあいの場を」という
ボランティアの趣旨をよく考え、これからも頑張りたいと思います。

最後に、お忙しい中、御指導下さいました講師の先生方に、厚く御礼申し上げます。

親子断絶、非行低令化、無気力等、前途暗いニュースが続き、子供達の将来は「これでは」と胸を痛めずにはいられない。

どんなに小さな古い鉛筆にでも、新しい一本の長い鉛筆と同様に、字を書く働きと、命があり、物豊かさの裏に精神面が欠けている今日、物や生命の尊さが、忘れ去られているようだ。

童話を通して、幼児期から、親子共に心の触れ合いとなり、小さな動植物はもちろん遊具や品物にまで、慈愛の気持が育まれるように願いつつ、日常生活を架空化した四、五歳児向きの創作童話。

針^{はり}谷^{がや}照^{てる}波^は

童話？ 童話って、ふんわり、つかみどころがなくて、ぼうっと、ひかるように美しく、作ってみたい気持ちもするし、近寄りがたい何かも感じる。そう思っているのに、なぜこのグループに参加した？。早船ちよ先生がおいでになる、と聞いたからである。

高名な先生のお話を、ぞかにお聞きできるといふ事は、テレビにかじりついている事の多い身にはしあわせというもの……………。

ちよ先生は最初から、

「作品の発表をはずかしがらないこと」

と、おっしゃって、この次までに（二週間後）と、早速童話を一篇つくってくるよう、宿題をだされた。

その後、回をかさねて、講師の先生も、早船ぐみお先生、中野みち子先生、菊地澄子先生、武田英子先生、等に親切な指導をいただきました。ありがとうございました。

福 田 ま さ

若いお友達に交って一つの作文を書いた。これが一冊の本の中に納められることの不安と期待と、そんな気持ちのうちに、それぞれ持味の違う内容をもつ童話集出版の話はすすむ。ただ本を読むことが好きというだけでこの活動に出席した私ですので、出来上がった本は悦び、否、どんな失望を感じさせる事になるのでしょうか。何しろ一作は、自分なりに書いた少しの期待と不安のなかでの発刊を前にして、早船ぐみお先生はじめ、公民館の先生、お友達の皆様に感謝の気持ちでいっぱいです。

小 島 朝 子

なにかしら肌寒さを感じるこのある日々に、そこだけが、あたたかい「日だまり」のように、やさしい温もりが満ちあふれていました。

そのことは、創作童話ボランティアの講座。講師の先生方の話す言葉、雰囲気、童話の世界そのものでした。きっとあたたかくて、やさしい、豊かな「ところ」をもっていているのではないかしら……。童話を創り出すことはまず「ところづくりから」。そんな風に思えました。

ある日、「ごおよんさんにいいち」を、声を出して読んでみると、モデルとなった息子が、照れ笑いをしながらも面白くてたまらないといった様子で聞き入っていました。あれこれ語り合いながら読み進むうちに、いつかあたたかい空気につつまれ、まるで日だまりの中にふたりでひたっているように感じられました。

このようなすばらしい講座に参加する機会を持つことが出来、本当によい勉強となりました。そして、先生の御指導のおかげで「ごおよんさんにいいち」を創り上げることができました。これからは、この作品を母と子の「たからもの」として、いつまでも大切にしていきたいと思っています。